

アトランティック・カナダの資源と環境 ——リチャーズの『薄幸の友』を中心に

荒木陽子

はじめに

カナダの東端に位置し、カナダ連邦参加後の歴史が比較的長い沿海諸州は、20世紀初頭までに天然資源を搾取し、基幹産業を築くことによって地域を発展させた。中でもニューブランズウィック州とノヴァスコシア州では、早くは18世紀より工業化に有用な天然資源の開発が進み、州を繁栄に導いた豊かな森林や石炭といった天然資源を枯渇させつつある。ここで、プリンスエドワード島州が除かれるのは、同州は面積が小さく、赤毛のアン・シリーズの映像化で世界的に有名になった、農業、観光に利用される酸性の赤い砂礫質のシャーロットタウン・ロームと呼ばれる土壤ないしは土地と水産資源以外に、特に工業化に有用な資源をそれほど持たなかったからだ。

そして、これらの2州では、天然資源に依存するかたちで存在していた基幹産業、すなわち林業と炭鉱業、そして、石炭を使った製鉄業の衰退を、21世紀が約20年経った現時点で、すでに長きにわたり——ノヴァスコシアでは20世紀前半から、さらにニューブランズウィックに至っては実のところ19世紀後半から——経験してきた。この点で、これら2州はアルバータ州、ブリティッシュ・コロンビア州、さらにはオンタリオ州北部に代表されるように、現在進行形で大規模な資源開発が進むケベック州以西のカナダとは、事情が異なる。

カナダ沿海諸州における前述の状況をカナダのその他地域と比較した際に顕著となる、同地域の異質性、「相対的後進性」は、20～21世紀転換期において、そこを舞台に描かれる文学の消費のありかたにも大きな影響を与えた。バーミンガム大学のカナダ研究者ダニエル・フラー (Danielle Fuller) がその論文で指摘した通り、大都市に拠点を置くカナダ大手出版社は、沿海諸州を含むアトランティック・カナダを舞台とする文学に描かれる国内の「発展から取り残された」世界を、人口が集中する大都市圏で都会的生活を送る読者(消費者)の「他者」として、また過去へのノスタルジアの対象としてマーケティングすることに成功し、軒並み高セールスを記録することとなった。筆者がこれまでに拙稿で扱ったデイヴィッド・

アダムズ・リチャーズ (David Adams Richards, 1950-)、アリストア・マクラウド (Alistair MacLeod, 1936-2014)、さらにはアン＝マリ・マクドナルド (Ann-Marie MacDonald, 1958-) の作品は、この流れの中で商業的成功を取めたこととなる。¹⁾

ただ、現在豊富な資源をもとに繁栄するカナダの他州として、その埋蔵資源が無尽蔵ではないことは明白だ。本稿はカナダの未来を予期させる天然資源に依存してきたニューブランズウィックの文学から、同州北部のミラマシ川流域の林業の衰退と森林資源を用いた産業の変容を描く、デイヴィッド・アダムズ・リチャーズの『薄幸の友』(*The Friends of Meager Fortune*, 2006) を取り上げ、カナダ上院議員でもあるニューブランズウィックを代表するこの現代作家が、資源採取型経済の帰結をいかに描くのかを環境を意識しながら検証したい。なお、本稿中の英文の日本語訳は、既存のものがない限り筆者が行ったことをここに記す。

I. 作者デイヴィッド・アダムズ・リチャーズとその評価について

デイヴィッド・アダムズ・リチャーズは1970年代に作家としての活動をはじめ、これまでにフィクション、ノンフィクション合わせて30を超える作品を上梓してきた。しかし、日本では翻訳を含む「紹介」が進んでおらず、アトランティック・カナダの文学を研究する筆者、およびクリストファー・アームストロング (Christopher J. Armstrong) 以外によってはあまり研究対象とされてこなかった。ただ、カナダでもベストセラー作家であり、80年代以来カナダ総督賞やギラー賞などの大きな文学賞を受賞しながら、2000年代をむかえるまで研究書が出版されず、学術論文についても、初出が1989年のフランク・デイヴィ (Frank Davey) の論考や、前述のアームストロングとハーブ・ワイル (Herb Wylie) によるリチャーズ作品のアトランティック・カナダ文学としてのキャンノン化の如何を問う共著論文を除いては、2000年代までそれほど文学系学術誌に掲載されてこなかった事実は特筆するべきであろう。

リチャーズの学術研究が進まなかった理由については、ニューブランズウィック研究の第一人者であり、リチャーズの研究書および評伝の著者・編者であるセント・トーマス大学のトニー・トレンブレ (Tony Tremblay) が2005年の論考「カナダの独立系知識人」において、興味深い指摘をしているので、20世紀半ばのカナダおよびニューブランズウィックの文学状況を補足しながら紹介したい。カナダの作家はしばしば大学の国文学研究者や創作科教員と重なるが、彼らは学生を含む数名のグループ

で活動し、批評・創作双方向からトレンドを作り出し、自らないしは縁者が経営に関与する出版社から有望な作品を出版していくことが多い。古くは1960年代以降に若手作家たちが次々と設立したハウス・オブ・アナンシーなどの小規模出版社、近年ではその代表としてリサ・ムーアをはじめとするニューファンドランド島セントジョンズ近辺の作家の勉強会バーニング・ロックを、その例として挙げることができよう。20世紀半ばから後半にかけてのニューブランズウィック州フレデリクトン周辺の文学状況もこの例にもれない。ニューブランズウィック大学英文科教授であり詩人のフレデリック・コグズウェル (Frederick Cogswell, 1917-2004) は、同僚のデズモンド・ペイシー (Desmond Pacey) らとともに、教育者・研究者としてカナダ文学のキャノンづくりとその普及に大きく寄与した。さらにコグズウェルは、大学を編集拠点とする文芸誌『フィドルヘッド』(*The Fiddlehead*) に深くかかわり、若手作家に作品発表の機会を与えるとともに、優秀な作品を書籍として出版するために1954年、フィドルヘッド・ポエトリー・ブックスとして現在も地域の文学を支えるゲースレーン・エディションズ (1983-) を設立したのである。

リチャーズはそのフレデリクトンのニューブランズウィック大学に隣接するセント・トーマス大学で学び、ごく初期には自然な流れで多くの詩人を輩出したニューブランズウィック大学アイスハウスにおける文学研究会などにも参加した。しかしながら、リチャーズはこうした主流グループに留まることはなく、卒業を目前に大学も去り、独自に文学を追求することを選択する。トレンブレイは、このように周囲の意向やトレンドに左右されずに、単独の関心を軸に活動するリチャーズを前述のとおり、独立系知識人と呼び、彼が主流の活動やムーブメントに関わらないため、いわゆるカナダ文学の大きな流れに位置づけられにくかったことを指摘してみた。

2000年代にリチャーズ研究が急速に発展した背景には、前述の2000年前後に始まる、過去のカナダへのノスタルジアや国内に存在する異質な世界のもつエキゾチズムを求めるものたちによって作られた、ある種のアトランティック・カナダ文学ブームが存在する。そのブームの求心力に、それまでリチャーズが描き続けてきたニューブランズウィック北部の小さな町と大都市との間に発生する地域間格差の問題——つまり斜陽の林業やそこから派生した製紙業、さらには自然を消費する都会人のために働くサーモンフィッシング・ガイドなど、旧来の天然資源に依存して生活する「貧しくも力強く」、リチャーズの価値基準で「正しい」一部の地域住民

たちの生き様——が、吸い寄せられたのだ。更に2013年にカナダの文学賞としては賞金が大いことで知られるギラー賞を受賞したリン・コーディ (Lynn Coady, 1970-) など、勢いのある若手作家への影響力も、リチャーズの学術的評価につながっているものと思われる²⁾。次章では、20世紀末の現在から約1世紀にわたるミラマシ地域の林業の栄枯盛衰を、最後の材木男爵 (Lumber Baron) の末裔と思しき男が語る小説『薄幸の友』を、特にその環境面に注目しながら考察したい。

II. ミラマシの森林資源活用の推移と環境の変化

『薄幸の友』は、ミラマシ川流域の山と森と街に生きた20世紀の人々を描く三部作の最終作品である。本小説は、筆者が2017年に論文「沿海諸州をゴシック化する」で取り上げた、ある製材所で使用された除草剤に起因する土壌・水質汚染とその土地に生きる人々をめぐる1作目『こどもたちのなさけ』 (*Mercy Among the Children*, 2000)、若くしてシングルマザーとなったアイルランド系カトリック教徒の「街」における生き残りをめぐる『傷心のミラマシ』 (*River of the Brokenhearted*, 2004) につづく最終作品である。本章でまず、最初に『薄幸の友』の物語の根幹にある林業者ジェイムソン一家の栄枯盛衰を簡単に紹介したあと、ミラマシ地域の森林資源を活用した産業の推移を紹介し、人間の事業の勝敗の要因を「自然」に委ねるリチャーズの環境観を検証する第3章の補足としたい。

本小説は、街の住人が最後の材木男爵オーウェン・ジェイムソン (Owen Jameson) の非嫡子と信じる1947年4月生まれの自称歴史家の無名の男性 (50歳) を語り手とする。物語は最初と最後に遺産整理の前に、町のはずれにある築90年のジェイムソン邸を見に行っただけの語り手の記述にフレーミングされており、フレーム内の出来事がより「歴史らしく」見えるよう細工されている。フレーム内部で語られるジェイムソン一家の歴史は、物語の始まりに先住民ミクマクのフランシス夫人 (Mrs. Francis) が語り手の祖父母メアリ (Mary) とバイロン (Byron) に授ける予言の真偽を問う形でクロノジカルに語られる。予言は夫妻に2人うまれる子供の代でジェイムソンの事業が終わるというもので、それはやがて現実のものとなる。

物語は20世紀前半に一代で財を成し早世した初代のバイロン、死後事業を引き継ぐ母メアリー、そして1930年代に材木水運中の事故で夭折する長男ウィル (Will)、叔父バックラー (Buckler)、次男オーウェン、そして後に詳述する伐採林の運搬中に起きる1947年の大事故をはさみ、オーウェ

ンの死後5年間にわたり事業を支えた語り手の書類上の父で、ジェイムソン家の従業員レジ・グリッデン (Reggie Glidden) の時代、つまり1950年代前半まで続く。リチャーズは時代を下るにつれて、ジェイムソン一家が、街からより遠く、人間にとって危険な自然環境における事業に挑まざるを得なくなり、その状況が引き起こす事故により事業が終焉するというプロットを提示しているが、これは史実と照らし合わせても、単なるフィクションとは言えない。

第一にジェイムソン一家の事業の終焉を一気に加速させる大事故が発生するグッドフライデー山の伐採は、なぜ実行されねばならなかったかを考えてみたい。第二次世界大戦前のウィルの時代に州政府森林局にグッドフライデー山周辺が伐採適地であることは報告済みである。それにもかかわらず、長期にわたってこの山の伐採が進まなかった理由の一つは、戦争のための労働者不足以外にも、例えば“devil's back” (73)、“devil's belly” (75)のように「悪魔の～」と名付けられた難所が連続する凍結した坂を通して、切り倒した木を川べりまで下ろす作業が大変な危険を伴うからである。ただ、その危険性が人の開発を拒み、グッドフライデー山周辺の木材を他地域より大きく育てていたともいえよう。ではジェイムソンをはじめとする地域の林業者は、なぜ危険を承知でこの地域の森林に手を付けたのか。それは、この時期までには良質な材木を安全に提供できる森は残されていなかったからだ。

ここで、現在もその時々で利用可能な森林資源により形を変えながら、数世紀にわたり存在し続けるミラマシの森林資源に依存する産業の推移を見てみたい。この地域およびその林業は豊富な森林資源、特にマストに用いる最高品質の大木を、18世紀後半より宗主国のイギリス海軍に提供することに始まる。ただ、後に木造船造船業で栄えるミラマシ地域の最盛期は長く続かない。というのは、1850年代までには鉄を多用する蒸気船が台頭するからだ。また一方でマスト材として利用できる大木は、このころまでに消費されてしまっていた。このように実はミラマシの黄金期は、1867年のカナダ連邦結成前に終わっている。

ただ、その後も森林資源を用いた産業は形を変え地域を支える。続く時代には、かつてマスト材として消費され、1825年の大火で焼失した大木の後に残された、次のレベルの木材が、家具や建材の材料として商品化される。ジェイムソン一家がこだわった人間が大木を切り倒して、丁寧に運ぶタイプの林業が必要とされる時代は主としてここまでである。最終的に20世紀後半になると、再植林から日が浅いため細く不揃いで、建材にも向か

ない木材が残されることになるが、これらは人間ではなく重機でなぎ倒され、トラックで運ばれ、製紙用パルプとして使用される。こうしてパルプ産業への推移が起こった。

このように、小説『薄幸の友』がクライマックスを迎える1947年頃には、長年の開発により、もはや手近なところに良質な木は残されていない。トレンブレイは2010年に発表したりチャーズの評伝『ミラマシのデイヴィッド・アダムズ・リチャーズ』(*David Adams Richards of Miramichi*)において、ニューブランズウィックの林業が、市場により近い州南部のセント・ジョン川沿いから始まり、資源の枯渇に伴い北上し、18世紀後半にミラマシ川流域に到達したことを解説している(6)。従って、ジェイムソンの事業の最終盤である20世紀半ばを過ぎたレジの時代になると、旧来の伐採・運搬方法にこだわるジェイムソンの伐採チームは、車や重機が入ることのできない、さらに北の危険な森の奥へと進み、最終的に滝を含む危険な運搬経路でレジが命を落とすことにより、事業の終焉をみることになる。ここに筆者は、森林の死が、事業者を死に追いやり、その結果、産業も死んでいく構造、すなわちリチャーズの環境観や、彼の考える人間と自然の関係性のあり方的一端を見出すことができると考える。

実のところ、立派な木材が減少しても、山はそれ自体の意図とは無関係に、地域の経済を支え続けている。本小説の第363頁で語り手が語る通り、伐採後のグッドフライデー山は、鉄鉱石を探していた会社によって削られる。林業が衰退した現在、ニューブランズウィック州北部の経済を支えるのは、このミラマシ・ハイランズから州北海岸へつづくバサースト・マイニング・キャンプにおける鉱工業である。しかしながら14歳だった語り手がこの山でスケッチした、打ち捨てられたままのジェイムソンの機材は、時が流れ、資源が尽きればこの鉱工業も終わることを示唆する(363)。

Ⅲ. 人間中心から森の自律的生態系への視点の転換を目指して

1. 自然が人間の味方となる例

——グッドフライデー山の大木、生物、大雪——

ただ第2章で紹介した産業は、あくまでヒトの視点から見た森林の利用であり、当然のことながら森林とそこに生きる生物はヒトの意図を解すことなく、独自の生態系をもって生き続け、時に死ぬ。グッドフライデー山が極めて良質な木材を生み出すに至ったサイド・ナラティヴはエコクリティシズムで重視される、人中心のもの見方からの発想の転換を読者に

うながす。小説288-9頁の記述によれば、ジェイムソンが大きな犠牲を払いながらグッドフライデー山から切り出した木材は、海運業が盛んだった1850年代以来最大級の量で、過去30年間で最高品質の木であると評価される。リチャーズはこの良質な材木をつくりだすメディアにビーバーをあてがう。かつてジェイムソン兄弟はライバルのエスタブルック一家 (the Estabrooks) からビーバーを盗んだものの、その発覚を免れるために殺すことができず、山奥に放った。そのビーバーの作ったダムが、人間の意図とは全く関係のないところで、グッドフライデー山の太木を育てたのだ(131)。

加えて、1908年の冬以来の寒波と大雪に見舞われた1946-7年の気候もまた意図せずにジェイムソン一家の事業の味方となる。大雪は機械化、電化を遂げ、トラックと電気鋸を利用するライバル業者スローン一家 (the Sloans) を操業不能に追い込む。さらに、好条件な伐採地を得たはずの前述のエスタブルック一家も自然環境由来の特殊な事情で苦戦する。ウィルの死後の混乱というジェイムソン家の不幸を味方につけて、エスタブルック一家が伐採権をかすめ取ったその森林は、ヨーロッパや合衆国で広がっていた害虫により内側から壊滅していた。この害虫はエスタブルックが訪れたニューイングランドの材木船ジェンセン・オッター号 (Jensen Otter) の船底から、訪問者の靴裏を介して広がったものだ。人間から見れば害虫に過ぎないこの虫も、種の生存のために必死である。こうしたエピソードもまた、自然は人間とは全く違うそれ自体のサイクルで営みを続け、森は生き、死んでいくことを読者に伝える。

2. 自然が人間の敵となる例

——『薄幸の友』の描く人間と動物の境界の危うさ——

前節では人間の意図とは関係のないところで、自立した生態系をもつグッドフライデー山の自然が、ジェイムソン一家の営みにプラスに作用した点を検証した。本節では自然がジェイムソン一家の営みにマイナスに作用した例を見ながら、自然と人間の境界線そのものを危ういもの、すなわち人間は自然の一部であり、自然の消失は人間の消失と重なると思われるリチャーズの自然観を検証したい。

殺人、不倫など大衆小説的要素も含め、ベストセラー小説『薄幸の友』には様々なプロットが錯綜している。例えば筆者は本作のタイトルに含まれる“Meager Fortune”を本稿が注目する悲劇的な主要プロットに合わせ「薄幸」と訳した。しかしながら、それは貧しく育ち出征中に火事で

妻子を失うという不運な運命を背負いながらも、伐採キャンプをその人徳と森の知恵をもって、冬の間林業に携わる時に荒々しい大男たちと使役動物を支えた、調理人・世話人の小男ミーガー・フォーチュン (Meager Fortune) の名前と掛け詞になっており、この物語は『ミーガー・フォーチュンと仲間たち』の物語としても読めるのだ。

しかし、読者であれば、物語の一番の山場がジェームソン一家最後の大規模事業となったグッドフライデー山の伐採とその顛末であることには異論はないだろう。前述のとおり、グッドフライデー山の価値は、1930年代のウィルの時代にすでに見いだされていたが、彼の事故死の後、第二次世界大戦による労働力不足、そして急峻で危険な地形のため、手が付けられていなかった。やがて第二次世界大戦から復員したオーウェンが、既に傾いた家業を終焉に向けて整理するべく、かねてから計画していた大学進学を諦めて挑んだこの冬の伐採が、ジェームソン一家に19世紀以来最高級の材木をもたらしたことも、すでに前節で確認したとおりだ。しかし、1947年4月、その運搬作業の最終盤に起こる事故は7匹の馬を巻き込んで4名の死者を出す。同業他社が近代的な効率性と安全性を求めて、大回りの道路を造成し、トラックで輸送する決断をする一方で、時間と費用の削減を求めたオーウェンが、あえて大量の材木の運搬に、材木を積んだ馬ぞりで、急勾配を川辺に向けて駆けくんだり、材木を川に流すという昔ながらの運搬手段を選択していたからだ。事故の死者はチームスターと馬だけではない。オーウェン自身も、命を落とした男の家族に補償すべく、自身の最初で最後の材木の処理を迅速にこなすために、事故後数日間、体調不良を押して不眠不休で働き続け、第二次世界大戦中で被弾した際の子傷が壊死し、急死を遂げる。

ここで筆者が目にするのはリチャーズが、優秀なチームスターたちとその助手の、良くも悪くも、気のたった馬同様に理性によるコントロールが利かない「人間の動物らしさ」、「人間に内在する自然」のために、大事故が引き起こされるといふ筋書きを用意する点である。チームスターのリーダーで先頭のそりを操るリチャードソン (Richardson) は、待ち構える新聞記者の写真に少しでも見栄えよく映り、自分を見限ったかつてのガールフレンドを見返すために、身支度を整えるべく持ち場を離れる。その際に、ここで写真に写りこむことで、自分を決して認めることのない父親を見返したいスタンプ係で運転に不慣れな大男ストレッチ・トムキンズ (Stretch Tomkins) が、材木を満載した馬ぞりを横取りして急こう配を滑降する。その結果、先頭の馬ぞりが事故を起こし、後続の馬ぞりが次々

に事故を起こすのである。

写真の撮影をめぐり2人の人間が本能に従い動く姿勢は、馬のブッチ（Butch）のそれと奇妙な平行線をなす。というのは、トムキンズのそりを引いていた馬のブッチは、トムキンズに復讐をすべく、この最後の仕事でトムキンズを殺そうと、氷が融けかけた川へと突進するからである。トムキンズが鞭で強打し傷口の開いたブッチの背中へ、先にトムキンズの放火でキャンプが火災を起こした際に火傷を負っていた。ただ人間の企てが報われなかったのと同様にブッチの企ても報われない。トムキンズはけがを負いながらも生き残る一方で、ブッチは川で溺死することとなる。さらに怒りと痛みで駆られ、結果的に川で溺死することになったブッチの姿は、伐採が進行中の1947年1月に女性をめぐる小競り合いの中、最終的に死の原因となった古傷を櫛で偶然衝かれ、痛みのあまり反射的に肘で相手の首を強打したところ、床屋のソロモン・ヒッキー（Solomon Hickey）を意図せず死なせてしまうオーウエンの姿をも喚起する（189）。このようにリチャーズは人間と動物の安易な区別を退けているように思われる。

上に示した動物と人間の境界の危うさ、リチャーズの人間の優位性の否定をさらに、強調するのが、馬の世話役ギップズ（Gibbs）の服に「こびりついた毛や汗が彼のものなのか馬のものなのか、その匂いが馬の匂いなのかわからなかった」（141）という、労役動物を愛し、山の生き物を食料とすることに抵抗を感じるオーウエンの言葉である。山奥の伐採キャンプでは、馬と数か月寝食をともにし、粗末な生活をつづけるため、人間である伐採チームと馬の境目はあいまいなものとなる。

さらにリチャーズは事故死のシーンを、4ページを割いて執拗に描く。それは、例えば、巨大な馬のダフにつぶされ即死した若干22歳のチームスター、カーティス（Curtis）や、カーティスの荷崩れした積み荷に断首された黒人チームスター、トレスウェイ（Tretthewey）の死に姿があらわす通り、究極的には両者は事故の際、平等に無残な切断遺体となり、その血と肉は雪と土と木の中で重なり合い、結びつき、ひとつになる（332-35）。カーティスは、馬の「ダフ・アルティマイティ（Duff Altimighty）のそばに、冬の間ずっと身に着けていたその手袋をはめた手に、手綱を握ったままの姿で横たわっていた」というのだ（335）。

むすびに

リチャーズは『薄幸の友』において、彼が本来自然の一部であると考えられる人間の過剰な森林開発が、結果的に一家の事業の終焉、ひいては古いス

タイルの林業の終焉を導いたことを描いた。彼はミラマシ地域の森林依存産業の一大転機となる電化、機械化、そしてパルプ産業への時代の推移を、古いスタイルの林業の象徴であった優秀なチームスターと馬の死を通して表象した。さらにリチャーズは時代の変化を決定づけるべく、チームスターと馬の事故の発生と、実のところ子の父をめぐる小競り合いの結果、躓いた母が早産したため身体障がいを負って生まれる語り手の誕生を重ねて見せる。このジェイムソンの血を引くであろう最後の男性はウィルやオーウェンのように肉体を酷使する林業者として生きることが、そもそも不可能なのである。

そして、物語の最後にこの語り手により記録に残される、かつてジェイムソン一家とともに働いた林業者の子孫たちの20世紀末における現状が、資源大国カナダの未来に警告を与える。

…かつてウィル・ジェイムソンが所有した製材所のわきの古いパイプで、新しい世代がスケートボードしている。シャツを風で体の後ろになびかせ、風の中で王子のようによろけたり動いたりしながら、廃屋となって久しく荒涼とした第30区画の地上9メートル強はあろう高所にある冷たいレールを上手いことりこなしている。この子たちは父の世代からの失業者で、父の祖父まで遡ってやっと仕事をしていた人物に出くわす。石のごとく頑強でとてもいい子たちだ。(365)

上の引用が端的に示す通り、資源に依存する産業は、その資源の供給が途絶えたとき、地域に長期間にわたる不況をもたらす。沿海諸州のかつての林業地域の経験は、現在大規模な資源開発の進む地域に、そしてカナダという国家にとっての警告となりうるのか。「豊かな自然」のイメージを売るカナダの未来が気になる。

本研究は平成28～令和元年度科学研究費助成事業（若手研究B課題番号16K16788）の研究成果である。関係各所に感謝を申し上げたい。

註

- 1) 拙稿「アリストア・マクラウドと環境に関する一考察」および「沿海諸州をゴシック化する——ポスト・インダストリアル時代の沿海諸州表象」を参考にされたい。
- 2) コーディが、地域のネガティブな側面から目を背けることなく、そのロマン化を拒否しながら描き続けるリチャーズの姿勢を称賛する様子は、レイチェル・ステーブス (Rachel Steeves) による彼女の2007年のインタビューから読み取れる (234)。

引用文献

- 荒木陽子「アリストア・マクラウドと環境に関する一考察」『エコクリティシズムの波を超えて——人新世の地球を生きる』音羽書房鶴見書店、2017、183-198。
- 、「沿海諸州をゴシック化する——ポスト・インダストリアル時代の沿海諸州表象」『カナダ文学研究』第24号、2017、pp.17-35。
- Armstrong, Christopher, and Herb Wylie. "Firing the Regional Can(n)on: Liberal Pluralism, Social Agency, And David Adams Richards's Miramichi Trilogy." *Studies in Canadian Literature*, vol.22, no.1, 1997, pp.1-18.
- Creelman, David. "Congruence and Recurrence in the Literatures in New Brunswick." *New Brunswick at the Crossroads: Literary Ferment and Social Changes in the East*, edited by Tony Tremblay, e-book, Wilfred Laurier UP, 2017.
- Davey, Frank. "Discourse and Determinism in *Night Below Station Street*." *Post-National Arguments: The Politics of the Anglophone Novel Since 1967*. U of Toronto P, 1993. 67-80.
- Fuller, Danielle. "The Crest of the Wave: Reading the Success Stories of Bestsellers." *Studies in Canadian Literature*, vol.33, no.2, 2008, pp.40-59.
- Natural Resources Canada. Energy Maps. 10 June 2019. <https://www.nrcan.gc.ca/maps-tools-and-publications/maps/energy-maps/16872>. Accessed 1 Aug 2019.
- Richards, David Adams. *The Friends of Meager Fortune*. Doubleday, 2006.
- , *Mercy Among the Children*. Doubleday, 2000.
- , *River of Brokenhearted*. Doubleday 2004.
- Steeves, Rachel. "'Flawed Splendour': A Conversation with Lynn Coady." *Studies in Canadian Literature*, vol.31, no.1 (2007): 231-38.
- Tremblay, Tony. "Canada's Independent Intellectual." *David Adams Richards: Essays on His Works*, edited by Tony Tremblay, Guernica, 2005. 78-103.
- , *David Adams Richards of the Miramichi: A Biographical Introduction*. U of Toronto P, 2010.